

少年時代の満州の記憶

神奈川県 堀 英夫

一 堀家の誕生と渡満まで

これっきり、もう娘と会えないかもしれない、そう思っついつい遠くまで見送りに来たおばあちゃんが、たった一人でホームに佇んでいた。

列車が動き出したときだった。おばあちゃんが何か言い忘れたことでもあったのか、急に手を振って叫びながら娘が乗っている列車の窓に走り寄って来た。見ると、おばあちゃんの目から大粒の涙がほっぺを流れていた。

母の隣の席に座っていた私は、生まれて初めて大人の人が涙を流すのを見て衝撃を受けた。「かわいそうなおばあちゃん！ いつまでも忘れないよ」私はしばらく座席にうずくまっつて、受けた衝撃を静めようとしていたのを覚えている。

昭和十六（一九四一）年九月十八日、家族みんなで満州へ連れ立ったのは、私が小学校二年生のときであった。北海道から満州へ行くことになったわけは定かではないが、今にして思えば祖父母の世代に起こっていたように思う。

祖父藤治は、明治十七（一八八四）年、富山県上新川郡大沢野村の貧しい農家の三男として生まれた。富山県は地形的には富山湾を要として、中部山岳の連峰が扇状に広がっていて、気象的には冬は豪雪、夏場は急流河川の洪水に見舞われるために、飢餓が頻発するという過酷な風土であった。農民の疲弊がひどくなって移住が取りざたされるようになって、日清戦争の前後に北海道開拓移民政策（明治十九年設置）が推進された。

明治四十一年、富山県から北海道への移民戸数は、前年に続いて全国一になっていた。この年の五月十四日に、祖父母は北海道沼田町（北竜村五ヶ山）に移住した。このとき祖父母は共に二十五歳であった。明治四十三年、私の父である長男

一美が生まれ、次いで同四十五年には次男の達夫が、大正二（一九一三）年には長女、同五年には次女をもうけ生活は一応順調であったが、渡道して十年目の大正七年、新しい入植地幌加内村字添牛内十五線に転居した直後、長女が五歳で、次女は三歳で相次いで亡くなった。

満足な道もない開拓地で苦勞していたときに、かわいがっていた娘二人を相次いで亡くした祖母の気持ちには、察するにあまりがあった。こんなとき私の父一美はまだ僅か九歳であったが、添牛内村の鍛冶屋「永井鉄工所」に丁稚奉公に入った。

鍛冶屋は、開拓農村では花形の職業であった。父はやがて鍛冶工として村一番の腕利きに成長し、見込まれて永井家の長女春姫と結婚して永井家からのれん分けをしてもらい、隣村の朱鞠内で独立した鉄工所を持つことになったが、父のこの時期は、持ち前の行動力をもって周囲の注目に応える成長の時代といえた。その後隔年ごとに子供四人に恵まれ幸せそのものであったが、そのころから

満州に渡りたいという思いを募らせていった。

平成七（一九九五）年九月に、郷里朱鞠内を通る深名線もローカル線廃線の一環として無くなるということを知ったのを機に、私は故郷を訪ねる旅に出た。故郷に鉄道が敷かれ、幌加内村字朱鞠内に駅ができたのは昭和七年十月で、ちょうど父がこの地で独立したときであった。私たちが満州に渡るとき、片田舎の添牛内から深川駅まで見送りに来て、惜別の涙を流した祖母の顔を見たのも、あの満州から引き揚げて来たのも、この路線のこの駅から始まったことであった。

堀家は昭和十六年九月十八日、朱鞠内を出発、新潟港を出航して朝鮮半島清津港に入港した。あこがれの満州国間島省延吉市に無事到着したのは、出発して四日後の九月二十二日、父一美が三十一歳のときであった。

二 堀家満州時代の生活

延吉市の空はどんより曇っていたが、駅に降り立つと大陸の名にふさわしく、広々としていたの

が印象的であった。私たちは、小馬が曳く「マー
チョ」に乗って市街地まで行くことになった。小
馬は首にかかった鈴を鳴らしながら、駅前ロー
タリーを右に回り街路樹に沿って進んだ。しばら
く行くと、崩れそうな土塀やレンガ造りの建物が
目立って増えてきたが、やがて大きな川にさしか
かった。私たちが延吉橋と名付けたその橋を渡る
と、賑やかな市街地が広がっており、私たちが通
学する間島省在満国民学校もあった。

住まいに着いて引越しの作業が落ち着き町の
様子にも慣れたころ、事業展開の準備が進んでい
た延吉市興南区恵工街に移転した。延吉の市街地
から見て川向こうの川下に位置した。父の事業は
農機具の製造であった。生産された農機具は、満
拓を通じて農家に供給された。

昭和十六年十月、敷地面積千五百坪の敷地に僅
か三十坪の工場を建て、「堀農機具製作所」の看
板を掲げて開業し、本格的な製造作業に入った。
工場の鍛冶場では、いつも父とほかに二、三人の

職人が働いていた。燃えさかるコークスの中で、
真っ赤に焼けた鉄を気合いを掛け合いながら叩き
に叩いて立派な製品を作っていた。「鉄は熱い
うちに打て」と言われるように、金槌の音が毎日
響いていた。その甲斐あって、製品の販売量は鰻
登りに増え、敷地内では毎日のように増築工事が
行われていた。工場の増築は七十坪に達し、新型
の機械もどんどん設置された。ほかに事務所が三
十坪、従業員の社宅三十坪などが新築された。通
勤で作業に従事する主に地元の朝鮮人従業員は、
常に三十人を超えていた。

私たちの家族は、両親と十二歳で小学校六年生
の兄を筆頭に、十歳で四年生の姉、七歳で二年生
の私、五歳の弟、三歳と一歳の妹の八人であっ
た。

工業地帯に指定されたこの区画には、私たちの
ほかに日本人はほとんど見られなかった。すぐ隣
は壺や瓶を焼く朝鮮人の家で、塀の向こう側には
棚が列をなして、大小様々な壺や瓶が干され

ていた。主人はとがった帽子を被り、白い服がよく似合う人であった。道を隔てた右隣には、中国人が経営する旋盤加工専門の工場があった。この工場は、私が敗戦後から帰国するまでの間、お茶くみボーイとして勤めた思い出の場所である。左側はいろんな工場が点在していて、各工場が巡らせている塀も、それぞれ違いを見せて特色があった。

父がもらってきた澱粉をまぶした飴の味が、また忘れられない思い出である。ふわっとした歯ごたえと、噛んだときにかすかな甘みがにじみ出る不思議な味覚が六十年経った今でも忘れられない。この飴工場もこの一角にあった。少し離れたところには満州特産の大豆加工工場があった。油を絞り取った大豆かすは、飼料や肥料にされた。豚も食べないというこの油かすが、敗戦の翌年から飢餓をしのぐ食品になるとは思いも及ばなかった。

学校は家から五、六キロメートルの距離で、延

吉川の川上にある延吉橋を渡った市街地にあった。校舎はレンガで造ったL型の二階建てで、町のたたずまいに比べて立派過ぎると思った。冬になると、町から消防車がやって来てグラウンドに水をまき始め、その水が凍ってスケートリンクに早変わりするのに驚いたし嬉しかった。夏に行われる体育の時間や運動会も、出し物は戦闘訓練一色になり、学校は予備軍を作るのかと思うほどであった。授業中も生徒指導は厳しく、私は三列目に座っていたが、先生に「あくびをしたな！ 前に出ろ」といきなり呼び出されて、往復びんたを食らった。鼻が取れてしまったかと思うほど痛かった。たかがあくびじゃないか、ここまで激しいびんたをとらなくても、子供心に先生をにらみ返していたように記憶している。

そのころ、臨時教員として軍服を着てサーベルを吊るした若い先生が来た。召集された先生の穴埋めだったのだろうが、私は軍人の姿を凜々しく思い、すっかり憧れていた。今思い出しても、

ちょっと気恥ずかしい。校内では禁止されていた「若鷺の歌」の歌詞を、友達に見せてもらってそっとノートに写したのも、似たような凜々しきに対する憧れだったのかもしれない。

私にとって今一つ思い出深いのは、通学路に沿った延吉川である。冬將軍がやって来ると、延吉川は凍ってすっかり陸続きになるので、遠回りしていた学校への道のりが一遍に半分近くなるのは嬉しかった。その上広い天然のスケートリンクは、私たちを十分に楽しませてくれた。

ある日遊びほうけて親指が凍傷にかかってしまい、母親に泣きついたことがあった。母が用意してくれた冷水に手を入れると、痛みが嘘のようすつと治まった。また一つ利口になったような気がした。

春になって川の氷が解けると、また元通り橋を渡って遠い道のりを登校するしかなかった。延吉川は普段は澄み切ったきれいな水が流れていたが、夏は洪水に見舞われることがあった。延吉川

の川下に満人部落があって、その近くに須道という同級生が住んでいた。水泳がうまく、この川を抜き手で横断していた。私が泳ぎを覚えたばかりのころ、浅いと思って立とうとしたら足が底に届かず、慌てて溺れそうになったところを助けてくれたのが須道君であった。彼はこのことを誰にも話そうとせず、私だけが知っている命の恩人である。昭和二十年八月、終戦のとき何の前触れもなく居なくなってしまうたぎり会っていない。もうあれから六十年近くになる。会えるものなら会いたい。一縷の望みをこの紙面にかけていることは言うまでもない。私の不確かな記憶では、須道君の名は確か「みちお(?)」といい、群馬県出身であったと思う。泳ぎのほかに、満人街の寺院などを一緒に見て回ったことがある。もう一人会いたいと思っている人がいる。姓は村山で、名は覚えていない。出身は長野県。家は延吉駅の裏手の開拓農家で、下校するときは一緒だった。一度彼の家に遊びに行ったことがある。

家から橋までの途中に朝鮮人の部落があり、寺子屋式の学校があった。私が下校するとき、遠くの方から氣勢を上げて迫ってくる集団があった。人数は七、八人で、棒きれを振り回しながら向かってくるのに度肝を抜かれ、これはかなわないと思っただだ夢中で逃げた。無事逃げ切れたが、後先を考えなかったのどすいぶん遠回りしてしまつた。こんなことが二度、三度とあつた。弟に話すと、弟も同じような目に遭つていた。

昭和十八年、事業は基盤が整い拡張期に入ろうとした矢先に、大黒柱の父が召集されてしまつた。銃後を守らなければならない母は、機械技術者で二十五歳になる弟を呼び寄せた。

この年の秋には、北海道の郷里から祖父の堀藤治と六男正義十九歳、七男定治十六歳の三人が満州に渡つてきた。

昭和二十年五月、北安省の開拓地に入植して五年、父の弟達夫の妻から救いを求める便りが届いた。達夫の所には、六男の正義も手伝いに入つて

安泰な日々が続いていると思つていたが、召集が増加して次から次へと男手を奪つていくなか、達夫も召集され残された二十五歳になる達夫の妻が病に伏して、力尽きた果ての知らせであつた。キヨは、四人の幼子を抱え酷寒の地で病に倒れたら何ができようかと考えると、私には言葉もなかつた。乳飲み子の悲鳴、憔悴しきつた子供たちの哀れな様子が脳裏をよぎつた。祖父と私の母が、四人の子供を引き取つて帰つて来た。

三 逃避行と飢餓

昭和二十年八月十三日、母は私たち子供を座らせたうえ少しかしこまつて、おもむろに短刀を取り出した。短刀をどこから手に入れたのか、見たこともなかったし、何より母には無縁の持ち物に見えたが、「いざというときは、これで死ぬのよ」そう言つて短刀を抜いて見せた。刃がキラッと光つたのを見て、私たちは「まさか」と思いながら、厳しく私たちを見つめる母の目を見ていられた。このときは、母は母なりに私たちに敗

戦の覚悟を無言で論じていたのである。あとになつて聞いた話では、八月十一日は土曜日、普段なら開いている満拓銀行が、慌ただしく閉鎖してしまつたという。「あのとき、おろせるお金はいくらでもあつたのに」悔しがる母の語りぐさである。

敗戦の事態を察知した母は、疎開の決意をしていた。疎開先への案内は憲兵上がりで、事務をしていた人であつた。満人街の細い道を何度か曲がつて着いたところは、この町には似つかわしくないほど立派な住居であつた。馬車で運んだ非常用の食品やら衣料は、家の廊下の床下と防空壕にしまつたが、あとで防空壕の物は荒らされてしまつた。

終戦の玉音放送を聞いたのは、晴れた日の正午であつた。ラジオのボリュームを上げて、なぜかみんな中庭に出て聞いていた。あのときのことです。私が覚えている情景は、「中庭に向かって何人かの人が立っていて、時間が止まつて庭の中ほどの

ピンクの花が、白く大きく膨らんでいる」であつた。大人の人と一緒に直立不動の姿勢で玉音放送を聞いていたこと。花が膨らんでいたのと、大人の人につられて涙が出てきたこと。この二点である。それにしてもあのピンクの花は何という花だつたのだろう。

玉音放送を機に、暗くて長い逃避行が始まつた。一番安全だと思つていた元憲兵の住宅が、最も危険な場所になつてしまつた。権力が逆転し、人種差別の抑圧が一挙に吹き出しそうなの、そんな空気が流れていた。私たちは、この家から近くの現地人の家に移つて身を隠した。そして、二階の部屋の片隅で恐怖におののきながら一夜を過ごした。そして翌朝早くに我が家に舞い戻つた。

ソ連兵が攻め込んで来たのは噂よりずっと早く、私たちが工場の住宅に戻つて二日と経たないうちに、いきなり目の前に現れた。この工業地帯が略奪の標的になつていたようだった。突然軍用トラックが家の前に横付けされ、何だろうと思ふ

間もなく二、三人のソ連兵が家の中に押し入って来た。ごつい体で青い目をしたソ連兵を初めて見たこと、何をされるか分からない恐怖があった。

ソ連兵の最初の侵入目的は腕時計であった。目に付く時計を全部取り上げるとあっさり出て行った。しかし、ホッとしたのもつかの間で、だんだん強盗に変わっていった。襲われるたびに女、子供たちは工場裏のトウキビ畑に逃げて身を潜めた。ソ連兵が工場内の機械を運び出す事態に至って、私たちは着の身着のまま母と使用人のお嫁さんと子供たちが十人、そのうち乳飲み子は抱き、よちよち歩きの子の手を引いて、背をかかめてトウキビ畑に身を隠して逃げ出した。人の気配のする所を避けて川沿いに進み、日が沈んで薄暗くなったころ、仕事で親しかった満拓職員の住宅に駆け込んだ。

二週間ほど経ったころ、解散した軍隊の日本兵が出入りするようになった。ソ連兵の強盗に対してこの日本兵は機敏な活躍をした。入って来たソ

連兵の手をつかんで廊下に引きずりおろし、蔓豆の茂っている畑に引き込んでやつけたという。この勇ましい活躍に、ソ連兵もさぞびっくりしたと思うし、こんな勇敢な日本兵がいたことも記録しておきたい。一方、ソ連のトラックが近づいて、一人歩きの女性がさらわれた話はよく聞いた。

敗戦に追い込まれた日本人は権威も財産もすべてを奪われたが、まだ命だけは無事であった。命を守ったのは弱い者同士が寄り添いながら持っている力を集結したからであった。

街ではこのころ民兵組織の動きが活発になり、気にくわれない日本兵を呼び出したり、日本人住宅からの立ち退き、外出禁止など弾圧が厳しくなってきた。大人も子供も、外に出られない日が半月ほど続いたころには、みんな時間をもて余すようになつていた。元憲兵のおじさんが、「片飛車戦法」の将棋を丁寧に教えてくれた。この指し手は今でも忘れていない。

将棋を教えてもらった日から、一、二カ月ほど過ぎたある日、心配していた悲しい出来事が起きた。元憲兵のおじさんが呼び出された。もう帰って来られないのではないかと心配していたが、四日経ったときに帰って来た。おじさんは玄関に入るなり、ぐったり倒れ込んでしまった。見ると体中に叩かれたあとが、あざやみみず腫れになっていて、私たちは息をのんだ。そっとお風呂に入れて休んでもらった。

身を切るような寒さの十一月を迎えたころ、私は給仕として工場に預けられることになった。給料はもらわない、ただ三度の食事だけという条件だった。何日か経ったとき、工場の主人が「おまえのママが来たよ」と叫んだので振り向くと、てん足で歩いてくる「おばあちゃん」がいた。主人は私が困った顔をしているのを見て、優しく笑っていた。事務所では、来客を相手によくマージャンが行われた。そのたびにオンドルに石炭を足し部屋を暖め、湯を沸かしてお茶を入れるのが私に

課せられた仕事であった。マージャンをする人は時間が経つのを忘れる。ときには夜半十二時を過ぎることもあったが、私はその間に一緒に起きていなければならなかったから、眠くて眠くて困った印象が残っている。でも、マージャンが終わったとき、勝った人からときどきおこずかいをもらうことがあった。私はもらったお金を使わず、貯まったお金を母に渡したときの母の喜ぶ顔を見ることが、私の生活の支えになっていた。

眠くて困った話の続きがある。当時、私には人に言えない夜尿症の悩みがあった。眠いのに、寝ることが恐怖であった。借り物の布団を濡らしてはいけない。できるだけ布団を横にずらして、できることなら敷き布団の下にもぐって寝たかった。夜尿症との戦いと寝不足の悪循環は続いていた。

工場での中国料理は、通常はトウキビを粉にして作った「まんとう」（中国パン）か、高粱飯が主食で、お汁は野菜と肉がふんだんに使われてい

た。ときどき出された餃子の味は格別であった。中国では旧正月が本祭りで、賑やかに祝っていた。このとき出された白米のご飯がおいしかった。現在、何不自由なく暮らしている日本では、あれほどのおいしさを味わうことはないと思う。おそらく「飢え」と「美味」の、摩訶不思議な関係があるのだと思う。

母が背負った深い悲しみの一つに、乳飲み子の死があった。狭苦しい台所のテーブルに、粉ミルクの箱が置いてあった。母は哺乳瓶の中の粉ミルクを早く溶かそうとしていた。薄暗い部屋の、僅かに明かりが差し込む場所で赤ちゃんが泣いていた。甲高く、ときにか細く消え入りそうな泣き声であった。時代の急変による環境の悪化は、赤子にとってはあまりにも過酷過ぎた。みんな神様に手を合わせるしかなかった。しばらくして、赤子は亡くなった。亡くなった赤子は秋のある日のたそがれどきに、駅の近くの大きな木の根元に葬ったと、姉が母から聞いていた。悲しくて痛ましい

話であった。

母にとってたくさんの子供たちの食事を作るだけでも大変な心労であつたらうに、行き詰まってきた家計をやりくりする苦労が重なって、その不安は大変だつたと思う。食事や、寝場所を求めて我が家に立ち寄つた兵隊さんから習つたのだと思うが、紙巻きたばこを作る技法を覚え、たばこの葉と紙とのりを仕入れて、みんなで葉を刻み紙で巻いて両端を切り揃え、紙の箱に詰めた。ときには年老いた祖父も手伝つたり、みんなで夜なべをしたりした。たばこの販売については、弟も橋のたもとで立ち売りをしたと聞いている。果たして本当だろうか。考えてみれば九歳といえれば母を慕う気持ちにや々と気づく年頃、母にしてみれば小判鮫に寄り添って付かず離れずにいる小魚のようなもので、もう大して手間のかからない子であつたのだらうが、きつと母の目の届くところで物乞い同様のことをしていたのではなかつたかと思ふ。

近年海外旅行に行ったとき、観光地などで近づいて来る子供を見たとき、昔の自分と似た光景を見たように胸を痛めたことがある。母が物を売って歩く姿など、想像すらできなかった。十四歳の姉は、母と一緒にひまわりの種を売って歩いたという。負ける前は現地人が売っていたひまわりの種である。立場が逆転してから、母たちは現地の人と同じ地獄を見ていたのだろうか。母がこぼしていたことに、大福餅の売り歩きがあった。朝早く大福餅を仕入れに行つて、その日のうちに全部売りさばかなければ、商売は成り立たなかった。売れ残つた大福餅は捨てるわけにもいかず、腹を空かせて待っている子供たちに与えることになるのがいつものことで、ついには仕入れの金が無くなって困つたことがあつたとこぼしていた。

豚も食べない大豆かすしか食べるものが無くて、それを口にしたときは、さすがにこの世も終わりかと思つた。まずいうまいという段階を遙かに超えて、のど元を通らないのである。いくら腹

が減つても食べられないものがあることを、そのとき知つた。もちろんその後の人生においても、これほどまずい食品を口にした経験はない。

こんな敗戦という激変にさらされた当時を振り返つてみると「情けは人のためならず」という諺が思い出される。私たちが避難のためにあちこち逃げ回り、蓄えもなくなり万策尽きたときに、堀家が工場を開設当時雇つた満拓公団の人たちや、現地で採用した人たちに助けられている。危険な民兵警備の目を逃れて、密かに食糧を差し入れてくれたのには感謝のほかなかつた。

日本人は、民兵から住居の立ち退きを強要された。私たちが最後に落ち着いたのは、電電公社の社宅であつた。約百メートルの幅の敷地に五、六棟の社宅が二列に建ち並び、前には広い道路が通つていた。落葉樹の葉も落ちて厳しい冬がやってきた。昭和二十年十一月から翌年の五月までの六カ月間、寒さと飢えとの戦いが始まり、ソ連兵の襲撃略奪におびえる毎日が続いた。しかし、現

地民兵組織とソ連軍との話し合いが ついたのであろう。ソ連兵の暴行を監視するために警備所ができたが、夜半玄関のドアをこじ開ける音が絶えなかった。そんなときでも、息を殺してじっとしているしかなかった。玄関のドアは補強を重ねてだんだん頑丈なものになっていった。このころには、母も姉も幼い妹までも断髪して男に変身していた。

師走も過ぎたころ、各住宅が少年義勇隊員を預かることになった。私の家の叔父を含め十四人の大所帯に、岡山県出身の十一歳になる梶山孝一郎君がやってきた。若い男の人が加わり、我が家は賑やかで明るくなった。夜には、子供たちは敷いた布団の上で騒ぎながら団子になって寝た。このころから虱しゅうみがわいて、ストーブの上でシャツからふるい落とすほどになっていた。今でもぞっとする状態であるが、この虱が発疹チフスを蔓延させる原因になった。昭和二十一年三月十三日に祖父が亡くなった。六十三歳の老いた祖父には、寒さ

と発疹チフスの高熱に耐える力はなかった。祖父が息を引き取るとき、祖父の末っ子の叔父も発疹チフスにかかり、同じ部屋で高熱にうなされていたので、親の死に目に会えなかった。叔父はそれが悔しくて、病気が治ったあとでお墓参りをして泣いていた。

この冬をしのぐための燃料は、この社宅に備蓄してあった石炭であった。この石炭が底をつくころ、兄の活躍が始まった。外に出て枯れ葉を拾い集め、燃料の足しにした。しばらくして次に兄は、ニクロム線を見つけてきて電気を流して、風呂の湯を沸かすのに成功した。これは工業中学校で習った物理実験の成果であった。

兄に連れられて薪を探しに出たときのことであった。農家が点在しているのに、人っ子一人いない農場に行きついた。暴動があったあとらしく、どの家も玄関や窓が壊されていて、家の中の床板まではがされていた。私は所々に落ちていた銃弾を拾ってポケットにしまうと、「危ないから

やめろ」と兄に叱られ、元の場所にそつと戻した。驚いたのは次の部屋の戸を開けたときであった。部屋は荒らされていなかったが、人の死体が放置されていたのである。怖かったが、この家の広々した畑にはゴボウだけが取り残されていたので、苦勞したが二人で掘り出して持って帰った。

昭和二十一年五月十八日、家族たちは延吉の市街地にある康生院（アヘン治療院）へ移り住むことになった。扉をくぐって院内に入ると、部屋は壁が真っ白で天井が高く、まるで体育館のようだった。そこに私たちが持ち込んだ荷物を並べて縄張りを作り、自分たちの寝泊まりする場所を確保した。働き手が職場に出ている間、子供たちの面倒を見るのは、母とおぼさん（使用人のお嫁さん）の二人しかいなかった。毎日食うや食わずやの日が続いていて、世話する二人は身が細る思いであつたらう。うつろに座り込んでいる子供たちを呆然と見ている自分に気が付き、飢餓と絶望が心の中で渦巻いて、「いつ帰れるのか」「助からな

いかも」と思っていたのであろう。父の末弟定治（十八歳）、母の弟博（二十七歳）が職場に復帰して懸命に働いていたが、七月九日、預かっていた七歳の滝江ちゃんがついに帰らぬ人となった。

疲れ切った母を案じて、おぼさんは日本人の子供を欲しがっている中国人がいるという話を母に告げ、預けることを勧めた。母は悩み抜いたあげく、やはりそうするのが最善の策と決意した。預けるなら、兄の照夫と弟の光義を一緒の方が、お互い助け合って生きて行けると考えたようだ。しかしそう決心したものの、いざとなるとひるんでしまったようだった。この様子を察して、おぼさんは母のいない間にこっそり二人を預けに行った。だが兄の照夫はこの義父母になつかず、別の中国人に引き取られていった。

このときから四十年後の昭和六十年二月、神のご加護としか言いようのない幸いが訪れた。札幌に住んでいる私の姉石井松子が、第七回中国残留孤児肉親探しのテレビを見ていて、その中の一人

が照夫に似ていると直感したのが始まりであった。二月十九日、昭和二十三年シベリアから復員し、七十三歳になっていた伯父の達夫と、その子の照夫が親子の対面を果たした。さらに十二年後の平成十年十一月九日、残留孤児来日調査で弟の光義が確認された。二人が泣く泣く別れた日から五十三年ぶりに再会できたのである。二人は喜びの涙を流した。私たちも二人の生命力の強さと、その後の苦労を思っ涙が流れて仕方がなかった。今後力強く生きていってほしいと願っている。

四 満州からの引揚げと郷土

満州からの引揚げを前提にアヘン病院に入ってから、厳しい貧困の中で「もしかしたら、日本へ帰れないかもしれない」という不安の中で「ひょっとすれば」と思っていたことが現実の朗報となったのは、三カ月後のことであった。しかし帰国するためのお金がなかった。このとき母の弟、博が残って働くことを条件にお金を借りたと

いう。この姉弟愛について、あとになって分かったことであった。

昭和二十一年八月二十一日貨物列車で延安市を出発し、五日目の八月二十六日に新京（長春）に到着した。この駅から荷物を背負って、数十キロメートル歩くことになった。街を抜け、山裾に沿った道をかかなりの人が歩いたが、次第に列が伸びてきた。前の人から遅れまいと親子とも必死に歩いた。歩き続けて広い野原を歩いていたとき、パンパンと銃声が聞こえた。銃声をした方を見ると、小高い丘の頂に人影が見えた。我々を引率していた中国政府軍も、機関銃を据えて応戦が始まった。大人も子供もリュックサックなど荷物を頭の前に置いて盾にして、身を低くした。私の近くにも二、三発「ビューン」と弾のうなる音がし、土が跳ね上がった。このまま戦闘が続けば悲惨なことになると思ったが、戦闘はすぐに終わったので家族みんなで顔を合わせて無事を喜び合った。この地は、政府軍と八路軍の勢力境界線だった。

たのだろうと思っっている。

九月二日、この近くから無蓋貨車に乗ることができた。貨物列車は、奉天（瀋陽）に着くまでの二日間、果てしない平原をゆっくり走った。私たちは荷物を貨車の周囲に置いて人が落ちないようにしていたが、長い棒の先にかぎを着けてこの荷物を引っかけて盗む盗賊が現れた。仕方なく、今度は荷物を真ん中に置くことにした。おかしな光景であった。

九月四日、奉天からは有蓋貨車や枠のある貨車の列車を乗り継いで、錦州までの列車の旅が始まった。囲いがあるとはいえ、屋根のない貨車に乗った人たちは、雨が降り出すと話し声も途絶えがちであった。列車は、ときたま動いてはすぐに止まるということを繰り返した。闇夜に降った雨で着物がびしょ濡れになってしずくが垂れているのを見ると、この動かない列車が歯がゆく憎くくなった。これも忘れられないことの一つである。普通なら二日の距離であった。

やっと錦州に着いたのは九月十一日であった。

樹木がほどよく茂った敷地の奥の方に家屋が建っていて、ここが日本に引き揚げる最後の難民収容所になった。ここに五日間滞在した。最後の晩は、子供は子供たちで外をぶらついた。どちらを見ても日本人ばかりで怖いものはないはずなのに、裸電球がぶら下がっている薄暗い広場に、二、三人が囲まれた人の輪があちこちにできていた。輪の人たちからなじるような声が聞こえてきた。みんな日本人だった。取り囲まれた人は座っていたが、一人が立ち上がって何やら言い訳しているようであった。別の薄暗い場所では大きな湯を沸かす釜があり、そばにぐったりして動かなくなった人が数人無造作に放り出されていた。リンチが行われたむごい有様だった。いわゆる「吊し上げ」であった。吊し上げて何を「総括」したのだろうか。むごい「粛正」だったとすれば、あまりにも悲しい。「平和のための戦争」などあり得ないように、「粛正のための総括」もまたあつて

はならないと思った。

昭和二十一年九月十六日、錦州から葫蘆島コロカの港に移り、引揚船「摂津丸」に乗船した。出港は九月十八日、航海は浪が荒く甲板が浪しぶきに洗われるほどで、私は船底の部屋で身を横にして船酔いに耐えていた。

九月二十日、待ちこがれた日本の山川を見たとき、これが日本だとしみじみ確かめ、祖国がこんなに有り難くこんなに懐かしいものと改めて知った。筆舌に尽くしがたいこの感動は、体験したものでないと理解できないと思っている。九州佐世保港では、検疫のため沖で約一週間停泊した。その間みんな思い思いに好きなことをしていた。私は甲板で配給された乾パンをかじりながら、初めて大人がやっている囲碁を見ていた。それ以来、囲碁は私の趣味の一つになっている。

二十九日、日本国土に上陸、喜びの一步を踏みしめた。当日、DDT散布消毒を受けたあと、佐世保の引揚援護局の宿舎で二泊し、十月二日南風はえの

崎さきから帰郷の途についた。山陰、北陸と日本海側の鉄道を利用したが、列車の混雑は大変なもので、乗り降りは窓からしなければならなかった。子供は、手荷物を置く網棚に乗せられた。青函連絡船で北海道に渡り、深川駅に着いたのは十月四日の夜で、深名線の接続列車もなく、駅近くの旅館に一泊した。翌朝一番列車に乗って、長い旅行の終着地、郷里添牛内に向かった。

昭和二十一年十月六日、延吉を出発してから四十六日目、苦勞の連続であったが、無事郷里の地に降り立つことができた。すでに肌寒い北の晩秋なのに、日差しを受けている駅ホームの花壇は心に温かく映り、懐かしかった。十月六日は、堀ファミリーの「故郷の日」になった。

五 帰郷後の再建と思うこと

私たちが着の身着のままでもどり着いたのは、母の実家永井鉄工所であった。満州で昭和十八年に召集されていた父は、昭和二十一年元日早々に、中支から復員していた。父にとって母方の祖

父とは師弟関係であって、身に付けた技術も結婚も、全部この古巣からスタートしている。長男、長女だった両親の男兄弟十人は全員が召集され、実家の鉄工業である農機具作りは祖父と女手だけで支えてきた。そんなところへ父をはじめとして次々に復員してきて、一挙に活気づいた。

添牛内で家族が父と一緒に暮らせるようになった翌年の昭和二十二年五月には、当時三十七歳だった父は家族八人を引き連れて、深川市の「小田馬そり工場」へ転職することになった。私たちの住まいは、この工場の一画を間仕切って造った。ここでの仕事は馬そりや馬車を作るのが専門で、十七歳になった兄も父の仕事を手伝うようになった。母と十五歳になった姉は、食糧自給のために近所の農家の小作に通っていた。

父は翌年の昭和二十三年二月、家から数キロメートル離れたところに工場を構え、独立の第一歩を踏み出した。工場の名称は、満州と同じ「農機具製作所」であった。主な製品は農業林業製

品にわたり、農機具一式、トビ、プラオ、ハロー、バチバチ、馬そり、馬車などであった。鉄工、木工、旋盤、溶接機などの設備も充実し、毎年のように改築、増築が続いた。父は時代の進展を見通し、普及する自動車の整備業にも早くから着目して準備を進め、昭和三十四年には自動車整備工場を併設して認可を取り、扱う車両も大型車として主流になってきた。現在は民間車検の指定工場として弟がその経営を任され、孫たちが活躍する場となっている。

平成五年三月二十三日、母が八十四歳で亡くなり、あとを追うように平成七年八月九日、父が八十六歳で永眠した。葬儀に参列した人の中には初めて会う人も多く、紹介にもとまどうような有様であったので、「堀家いとこの会」を発足させることになった。隔年に行われる今年で四回目の会合も、四十人を超える人たちが出席した。

この労苦記録を書くに当たって、満州での生活、敗戦、引揚げの苦難の記憶をたどってみる

と、いろいろなことが振り子のように去来した。罪深い「戦争」と、得難い「平和」である。五十七年経った今、「平和ボケ」という言葉を聞くようになった。日本が平和な証拠だという人もいる。しかし、平和への願いは、百年経っても五百年経っても薄らぐようなことがあつてはならない。大きな犠牲を払って、「もう戦争は起こすまい」と何回も誓った日本である。これを、子々孫々まで伝える責任を強く感じている。

私は今五人の孫にも恵まれて、まことに果報者と思つている。かつて敗戦で勝ち取った「自由」が勝手気ままな利己主義に陥らないように、若い人たちに「責任ある自由」の尊さを根気よく、優しく導いていかなければと思つている。

思い出「子どもでよかつた」

長野県 矢口寿子

私の父、矢口弁太郎は、国策移民として拓務省、陸軍省、関東軍の指導により、東十一県下の在郷軍人より選抜された第一次武装移民団の一員として、昭和七（一九三二）年十月に渡満し、十月中旬に佳木斯ヂャムスに着いたが、その間にも随分と苦勞をしたそうです。ひと冬を佳木斯で過ごし、翌年二月に三江省樺川県永豊鎮に先遣隊の一員として入植し、本隊受入れの準備作業に従事し、ここでも匪族の襲撃も、再三ならず遭つて、五十人以上の犠牲者が出るような苦勞だったそうです。昭和八年三月十日の陸軍記念日の日に、弥栄村イヤサカムラ開拓国と改称し、翌年十月に家族招致となり、長野県からも開拓花嫁二十人が弥栄村に嫁入し、そのうちの一人が私の母です。